
Emotion Diary Central

茅南 夕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E m o t i o n D i a r y C e n t r a l

【Nコード】

N 8 1 1 2 Y

【作者名】

茅南 夕紀

【あらすじ】

女剣士と王子の結婚一か月前からの一騒動。

一応恋愛物になるのかな？駆け引きとか無理なので、カップル成立してかなりたった後から話は進んでいきます。

*別サイトに投稿していたものを修正しつつ転載しています。
タイトルに深い意味はありません。

D i a r y (日記)とあるように過去の出来事を振り返りつつ進め

ていけたらなあというぐらいで、書き始めた当時に知ってる単語を並べただけです。

[illegible]

カーン・カーン・カーン・

教会の鐘が時を告げ、

リン・ゴーン・カーン・ゴーン

異なる音色の鐘が讚美歌の一節を奏でる。

街で働く者も街の外で農業を営む者も皆ひとしく作業する手を休め、茜色に染まる空を仰ぎ見る。

地平線へと沈みゆく太陽は今日の一日の最後の一仕事と言わんばかりにその黄金色の光を各地へと投げかけ、街の頂に聳え立つ王城ももれなくその色に染まり、王冠のごとく光輝いていた。

冒頭詩とプロローグ（後書き）

投稿文字数に満たなかったので、冒頭詩と一部プロローグをつなげる形になりました；

1 - 1 話

街で過ごす大半の人々が暖かい我が家へと帰路につくこの時刻、城内では兵士や召使用人といった者達の交代が行われる時である。

城仕えの者専用の食堂では、交代にこれから向かう者やすでに交代を終えた者がひっきりなしに出入りするため、厨房の火の上では具材が踊り、盛り付けられた料理は瞬く間に消えていく。

そんな中食堂へ行くこともなく、人気の無い一角で剣の素振りをしている一人の女性がいた。

透き通るような白い肌に、鋭い光を放つ灰色の瞳。

下の方で一つにまとめられたライトブルーの髪は彼女の動きに合わせ流水のように波打つ。

軽やかにそして華麗に、たんだん 淡々とこなしている彼女だが、振っている剣は一般女性が扱う細身の剣よりも幅が太く、どちらかといえば一般男性が扱うものと大差ない。

やがて回避の動きも混ぜながら行われていくそれはまるで剣舞を踊っているかのようなようだ。

” ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ ”

太陽がすっかり地に潜り、鐘が次の時を告げる頃彼女は素振りを終え、ゆっくりと剣を降ろした。

剣を鞘さやに納め、汗ばんだ額を手の甲で拭い空を見上げれば星が瞬いている。

「ユイカ、また剣か？」

後ろから掛けられた咎めるかのような声。

いつからそこに立っていたのか、気配を消して見ているなんて悪趣味だと胸の内で苦笑気味に呟きながら振り返る。

そこには漆黒の髪にエメラルドのように碧い瞳を持つ青年が立っていた。

王族にしか許されない紫（彼の場合は青みがかった紫）の衣を纏い、その上から羽織る赤い豪華なマントを王家の紋章が入った金のブローチで留めた姿を見れば彼が何者であるかすぐにわかるだろう。

「ええ、王子殿下」

その言葉に彼は何故か顔を顰め憮然とする。

エリカス・デュアル・フォンシエルこの国の第一王子だ。

次いで臣下の礼を取ろうとしたら手を掴んで止められてしまった。

「礼儀」は今はいらない。ユイカ・・何度言えばわかる？
君はもうすぐ私の妻になるんだぞ？」

「それでも今はまだ王城に使える剣士の身。
そのような無礼はできません」

妻になってもそんな無礼は出来そうにないとは思っけど。

「女の身でありながら、唯一王城に仕える城廷剣士か・・・
しかしだ、結婚まで一カ月を切ろうとしている。
そろそろ剣を置いて身を落ちつけてくれな……」

「絶対嫌！！」

結婚が正式に決まってから何度も繰り返された議論に体がカツと熱くなる。

「私から剣を取ったら何が残るというの？」

王城に嫁ぐ者としてマナーや礼儀もきちんと学んでいるのになど
こが不満？

私は、置かずにすむ限りは絶対に剣を置いたりなんかしないんだから！！」

気づいたら言葉を遮^{かぎ}ってエリカスに噛みついていた。

「不満か、それはいろいろとあるし君ならそれはとくに・・・と、それよりもだ」

そこで掴まれたままだった手をぐいっと引つ張られ、耳のそばで意地の悪い低い声が囁^{ささ}かれる。

「やっと普通に話してくれたね」

顔に血が上ったのが分かった。

「も、申し訳ございません！」

ふと気配を感じ、そのまま彼の腕に閉じ込められるよりも早く抜け出すと、私は頭を深々と下げる。

「・・・ユイカ？」

少し寂しそうな彼の声。

だけど恥ずかしくて頭を上げることができない。

城では・・・特にいつ誰がくるか分からない城庭ではやらないように気を付けていたのに。

そんな彼女にエリカスは優しく微笑んだ。

普段は毅然^{きぜん}として他人を寄せ付けない彼女のこんな様子を見るのは楽しく、心地よいものだ。

「頭をあげてくれ、君が普通に話してくれるほうが私も嬉しい。

さて、私は父上に呼ばれているからこれで失礼するよ。

剣のことについてはまた話し合おう。」

彼がマントを翻^{ひるがえ}し去っていく気配を感じ、ユイカはゆっくりと視線をあげ後姿を見送った。

「エリカス・・・」

幾度話し合おうとも平行線をたどるそれ。

『君ならそれはとづくに・・・』

そう分かって言っている。

でも、認められないのだ。

何故なら・・・

「けつ。なんだあれは？

こんなところでいちやつきやがって、いい迷惑だ！」

エリカスの姿が見えなくなった途端、聞こえよがしに声を張り上げる者がいた。

城に仕える兵士達だ。

回想を遮られ、ユイ力はため息をついた。

（いつもいつも、ご苦労様……………）

食事を終えた足でそのままここへ来たのだろう、酒を飲み赤ら顔になった彼らは軽鎧を身に着けたままだった。

これから宿舎に向かうのだと思われる。

ここから真逆の位置にある兵宿舎へ、わざわざ、遠回りして・・・

ユイ力は何事もなかったかのように身なりを整え、新緑のマントを羽織り剣を背負うと、兵士達の前を横切って裏門の方へと歩き出した。

あまりにも優雅に平然と無視をされ、思わず息を詰めてそれを見送りそうになった兵士達はいきり立った。

毎日何を言っても反応一つされないのはどうも気に食わない。

いや、もともと存在自体が気に食わないのだが。

「だから、お前みたいな女が城に居るのは嫌なんだよ！！」

『風紀が乱れる』と言わんばかりのこの言葉に彼女の足が止まった。ゆっくり向き直り、「そうだそうだ！」と騒ぎ立てる兵士達を射るような眼差しで見渡してきた。

「なにか問題でも？」

まだ夏のはずなのに、冷気がずっと降りる。

思わず口を噤んだ兵士達だったが、一人だけは黙らなかつた。

兵士達の中で最近実力が抜きんできたケルハンスという男だ。

「お前のような弱い女が剣士として城に居る時点ですでに問題じゃないか？」

女が剣士なんて、王に取り入ったとしか考えられんではないか。いや、現にそうだろう？もうすぐ王子と結婚するのだから」

その者の嘲るような言葉と態度に空気はキンツと張り詰め、周りの兵士達の体感温度は氷点下を超えた。

「黙りなさい、王と王子を侮辱するつもりですか？」

静かな硬い声。

「私が城に仕えるのは剣士としての実力です」

「実力？　ハハハ…面白い。」

ならその実力とやらを見せてもらおうじゃないか。

俺と勝負しろ。

俺が勝つたらお前は剣士を名乗るのをやめろ。」

「いいでしょう。その代わり私が勝つたら、先程の言葉を取り消してもらいます。」

「ああ、取り消してやるよ。」

「では」

ユイカは背負っていた剣をスラリと抜き両手で構えた。

「ふん」

ケルハンスもユイカの剣よりか細身の兵士用の剣を抜くと片手で構えた。

互いに間合いを計り、周りが固唾を吞んで見守る中ピリピリとした緊張感が一気に高まり、澄んだ金属音が夜空高く響いていった

1 - 1 話（後書き）

強い女性は憧れです。使いにくかろうとなんだろうと背中に背負った剣も・・・

今読み直すとなんでこんな無礼な兵士がいたんだろう。

結婚することが決まる前だったら分かるエピソードだと思っんですが（たぶん）、王子様と結婚決まってる人とやり合うなんてわからない。おバカなのだろうか・・・

というか、なんで上から目線。

代わりになりそうなエピソードが思いつかなかったので、このまま載せるしかないのですけども。

1 - 2 話

「はぁ・・・」

エリカスは廊下をのろのろと歩いていった。

王の部屋へと近づくにつれどんどん憂鬱^{ゆううつ}になっていく。

なぜなら、父親に呼ばれた理由の予想がつくからである。

（ また結婚式の打ち合わせかなあ…… 父上、大乗り気だし・・
）

別に結婚式を挙げるのが嫌なわけではない。

民間出の女性との結婚を王が祝福してくれるのは喜ぶべきだろう。
ただ、張り切りすぎるのはどうかと思う。

（ 父上が全て決めてしまうから、私が居ても意味がないよな
）
そう、

「ここはどうしたらよいかのう？」

と聞かれたとしても

「 おおそうだ！ エルマスニカ様式の調度品ならどうだ！？
あのデザインなら神秘的な空間が作り上げられるに違いない！
！
」

と一人で自問自答の末、解決してしまうのだ。
もう好きにしてくれ、と言いたい…。

（ なんの為に私は呼ばれるんだろう・・・ ）

そんな事を考え歩いているうちに、両開きの大きな扉の前へとたどり着く。

他の部屋とあきらかに違い質が高く、それぞれ無垢材の一枚板でできた扉。

王の部屋へと着いてしまった。

「はあ・・・」

エリカスはもう一度溜息をつくと扉を守る兵士に声を掛けようとした。

ところが廊下の向こうから人が走って来るのが見え、そちらに目をやる。

彼らはよほど急いでいるのか、エリカスに気付かず横を走り抜けていく。

（ 廊下を走るなんて礼儀がなっていない ）

緊急なのかもしれないが、王の部屋を素通りしている所を見ると違うような気がする。

注意しようとしたエリカスだったが、

「 おい、西の城庭だったよな？ 」

「 ああ、ユイカとケルハンスどっちが勝つだろうな 」

「俺はユイカだと思うぞ」

「いや、ケルハンスもあなどれんだろう、彼は最近の注目株だぞ」

「まだ間に合うよな？」

「わからん。とにかく急げ！！」

バタバタという足音とそんな内容の会話を残してその者達が見えなくなっただけには、そのまま固まってしまったエリカスの姿がポツンとあった。

（ユイカが西の城庭で戦ってる…戦ってる…）

その言葉が頭の中でグルグル駆け巡る。

それが落ち着き理解した時、エリカスは拳を握ってブルブルと震えた。

「結婚の前だと言うのに、怪我でもしたらどうするんだ！

あのじゃじゃ馬が——っ！ ユイカ——ッ！！」

エリカスは吼えろと、王に呼ばれていた事も忘れ、中庭へと一目散に駆けていった。

エリカスが中庭へ駆けつけるとそこは人で溢れ返っていた。

貴族に、兵士、召使・・・まるで城内の人間が全て集まっているかのようで、先程ユイカと分かれたときの静けさが嘘みたいだ。おかげで怒鳴りつけた人物が全く見えない。

（どうにかして前へ出ないと）

エリカスが人込みを掻き分けようと手を挙げたときだった。

ガキンツという音とともに折れた剣が弧を描き飛んでいくのが見えた。

「おおお」

というどよめきの後

「ユイカが勝ったぞー！！！」

という誰かの宣言。

途端に辺りは歓声とブーイングの嵐が巻き起こる。

エリカスはその中へ必死に分け入っていった。

「ケルハンスが負けたか、あい変わらずユイカは強いな」

「ああ。これなら最近悪くなっている都の治安も、じきに良くなるのではないか？」

「そうかもしれないな」

「おい、それはどういうことだ？　なぜ彼女が都の治安に関係する？」

少々不穏な話に近づいてみれば先ほど横を素通りしていった二人だ。

「王子殿下！ 実は・・・」

彼らから話を聞いたエリカスを見る間に青ざめていった。

「・・・なんだと？」

彼らから視線をずらし、前のほうまで進んでいたことによってやっと見えるようになったユイカを見詰める。

彼女は地面に仰向けに倒れているケルハンスへゆっくり剣先を向けたところだった。

「先程の言葉、取り消していただけますね？」

「・・・クソッ・・・取り消してやるよ！」

ケルハンスは悔しそうに地面へこぶしを叩きつける。
それを聞きユイカは剣を鞘に収めた。

傷を負ってもいなければ、息一つ切らしていない。

ユイカとケルハンスの差は歴然としていた。

「ユイカ！！」

やっと人込みを抜け、現れたエリカスに人々は驚き、騒ぐのをやめた。

「王子殿下だ」

「なぜここに…」

「それよりやばくないか？」

なにせ、王子の妻となるユイカにブーイングや歓声（「ファンコール」）をしていたのだから…

敵が多いようで実は隠れファンが多いユイカではあったが、王子が剣士を辞めさせようとしているのは周知の事実である。それ（ファンコール）を喜ぶとは思えなかった。

決闘を見に来ていた者達は互いに目を見合わすと蜘蛛の子を散らすように逃げていき、中庭にいるのはユイカとエリカスの2人だけになった。

「ユイカ！！ 君は分かっているのか？ 君は剣士である前に結婚を控えた身なんだぞ！？」

「エリカス様・・・私、勝ちました！」

誇らしげに微笑んでいるユイカにエリカスは怒鳴った。

「それぐらい見れば分かる！ それよりもだな…」

「王子殿下〜！ 王様がお呼びです。すぐにお越しく下さい！」

話を遮られ、渋い顔をするエリカスにユイカはそつと言った。

「お呼びですよ」

「ああ！」

分かっているというようにエリカスは声を荒げた。

けれどもユイカから目を逸らそうとしない。

彼の瞳には何か迷っているような色が浮かんでいた。しかし、

「行ってくる」

押し殺した声でそれだけ言つと踵かかとを返し王の部屋へと向かつて行つた。

怒っているが、どこか寂しげな彼の背中にユイカは心を痛めた。

彼がユイカの事を心配しているのはよく分かる。

よく分かるが・・・

「仕方・・・ないよね・・・」

エリカスがユイカを心配するように、ユイカはエリカスが心配だった。

（あの人は結婚と同時に王位に就く。

今まで以上に命が狙われてくる。

それらから彼を守るのが、私の役目・・・）

だから、剣を持つのは止めるわけにはいかないのだ。

剣士としての腕も上げていかなければならない。

ユイカは鞘に納まっている剣を見て寂しげに笑った。

「離れられない運命、ね・・・」

「・・・さて、宿に帰ろうか」

気を取り直すとユイカは城を後にした。

1 - 2 話（後書き）

できるだけ難しい漢字にはルビを振ってます。

2 - 1 話

城の通用口から外へ出たユイカは表門の方へと周り城の城門と繋がる大通りにでた。

そろそろ8の時ということもあり、そこかしこで香^{かぐわ}しい匂いが漂い、飲食店に立ち寄る客で溢れかえっている。

料理の匂いは混ざっても嫌な臭いにならないのだから不思議だ。

（ トマトとバジルの蒸し鶏サラダ、オニオンスープ、ビーンズキッシュ・・・ ）

各店のメニューが無意識に目に入ってしまい空腹感が増してしま^う。

（ うーん。食べて帰るか、宿の食堂で食べるかどっちにしよう？ ）

普通、王宮に仕える者達は城にある専用の宿泊施設で寝泊りするのだが、ユイカはかつての戦友が経営する民宿で寝泊りをしている。

以前。といってもほんの2・3年前はユイカも城で寝泊りしていた。

なぜ今は城から離れたところで宿をとっているのかといえば、それは、戦友である彼の結婚が決まった日の事だった。

祝福の言葉を贈るユイカに対し彼は照れくさそうにしていたのだが、ふと頭を掻いていた手を止めると

『なあ、俺はこれを機に兵士を辞めて宿を開くんだが…』

ん？ ああ、決定事項なんだも。辞表も出してきた。
ハハッ悪い悪い。

それでさユイカ、城で寝泊りするのはやめて俺の宿に来ないか？
客第一号って事で無料にしとくからさ。遠慮すんなって。

何？ 嫁に悪い？ そんなこと気にすんな。
宿ってのはいろんな奴が泊まる所だ。
いちいち気にしていたらキリが無い、構やしないさ。

それに誰かさんから離れてみるってのもいいもんだぜ。ハッハ
ッハ！ 』

そんな報告と提案をしてきたのだった。

当時は『誰かさん』が誰を指しているのか全く分からず首を傾げる
しかなかったが、好意に素直に甘える事にした。

剣士という職業は傭兵のようなもので、いつ裏切られるか分からない
危険性が高いことから城の者に嫌われやすい。
且つ、それが強い女性ならば尚更だ。ユイカも例外ではなかった。
うかつに城の外へ出ようものならスパイだのなんだのと何を言われ
るか分からない。

城内にいても常に一挙一動を監視されているような状態で精神的に
くるものはかなりあった。

そんな彼女を彼は氣遣ってくれたのだろう。

彼の所ならエリカスの信賴もある。（悪友なのだそうだ）

ユイカは友に感謝した。

今はエリカスと婚約もしているし、以前よりかいくぶん風当たりも
和らいだので城へ戻っても良いのだが、そうしないのは単にエリカ
ス自身のせいだった。

彼は婚約と同時に、劍士を辞めるようユイカを説得しに来るよう
になったのだ。

それだけでも気が滅入っているのに、これで城へ戻れば一晩かけて
でも説得しに来るに違いない。

劍から離れるつもりは毛頭ないので、そんなのは嫌だった。

ふと怒声が聞こえたような気がして後ろが氣になりそちらを見遣っ
た。

酔っぱらった男が一人店にいちやもんをつけているのが目に入る。

幸い近くにいた警備兵が気づいたようだ。

（最近あきらかに増えたよね）

前へと目線を戻しゆっくり歩く。

特にここ一週間ぐらいだろうか？柄の悪い者が目立つように思う。
その分警備も強化されているようだ。

大通りは良くても小さい路地裏まで手が回るかは謎である。

飲食店の数が少なくなってきた所で露天商で手鏡を売っているのを見つけ、手に取って眺めた。

（ 食べて帰るのは無し…かな？ ）

引き返してもいいのだが、もう半時もすればこの賑わっている通りも静かになるだろう。

そうなると帰るのがちょっと難しくなる。

手鏡には物陰からこちらを眺める剣呑な男達けんのんの姿が映っていた。

手鏡を露天商に返し、再びゆっくりと歩く。

路地裏へと入る道を1本・2本通り過ぎ、3本目で素早く曲がると更に細い道へと体を滑り込ませ、右へ左へと曲がって元の大通りへと出て来た道に戻る。

先ほど通り過ぎた2本目の路地でも同じことをやり、1本目の路地へと抜けて酒屋へ入る。

通り抜けたと見せかけて、ここの主人に頼んでカウンターの下へと潜らせてもらい、念には念を入れて倉庫にある抜け道を使わせてもらった。

（ここの主人によるとこの抜け道はいたずら好きなガキ共の置き土産ということになっている）

8の時が半ば過ぎた頃ようやく宿にたどり着くことができた。

2 - 1 話（後書き）

ちよつと矛盾してるところがあるようにも思います・・・
うまい言い訳はないものか・・・

2 - 2 話

「おう、帰ってきたか」

扉を開けると、そこには腕組みをした戦友が壁に寄りかかって立っていた。

「ただいまビッツ」

「晩飯は食べて帰ってきたのか？いつもより遅かったようだが」

「ちよつとね。」

城で喧嘩を吹っかけられて相手をしたり、街でつけてくる奴を撒いてたりしたから食べそこなっちゃったわ」

「それはちよつとって言うのか？」

「さあ？」

ユイカは肩を竦めた。

「それよりもビッツ、そんな所に立つてどうしたの？今の時間なら食堂は酒場の営業に変わった頃よね？」

「ここはビッツの意向で宿屋と酒場を両方経営している。」

「ああちよつとな」

ビッツはユイカを真似て肩を竦めた。

「お前を待つてたんだ。帰ってきた早々悪いが、下まで来てくれないか？」

「え、ええ…？」

（何かしら？）

ユイカはビッツの後へ続き階段を降りる。

「おい、帰ってきたぞ」

入口から奥にいる誰かにビッツが声をかけた。

”食いつけ防止”とかで幅の狭い階段と入り口のため彼の背中に隠れて奥が見えない。

（誰？ それに今日はやけに静かね。）

そう、この時間は客の笑い声やグラスの音などで賑わっているはずなのだ。

それがビッツが入口から奥に声をかけられるぐらい静かである。

嫌な予感にユイカは怪訝な顔を浮かべた。

「ビッツ？」

「ま、入れ」

踊り場のわずかなスペースにビッツが下がり、促されるままに酒場へ入ると思わず驚きの声が出た。

「エリカス！ どうしてここに！？」

「友人の店へ飲みに来たのだが、いけなかったか？」

しれつと答える彼だが、聞きたいのはそんなことではない。
いったいどうやって自分よりも先にここへ来たのかというの
はもちろん、何の理由でここへわざわざやって来たのかということだ。

「今夜はユイカ、お前とエリカスの貸し切りだ。

彼は一晚“じつくり”お前と酒が飲みたいのだそうだ」

「ええ！！」

“じつくり”と強調された言葉にユイカは叫んだ。

一晚じつくり酒を飲む。一晚じつくり話をする。

何の話かはおよそ検討がつく・・・嫌な予感的中である。

「ユイカ、ここに座らないか？」

エリカスは自分の隣の椅子を引き、たず訊ねた。

「いいえ、ここで失礼するわ」

あの話が始まったらすぐに上へ上がろうと、ユイカは酒場の入り口
に立っていることを選んだ。が、

「奥へ入れよ。俺が入れんだろうが」

というビッツの言葉に、ユイカはしぶしぶエリカスの横まで来た。

しかし、座ろうとはしない。

「座らないのか？」

「ええ」

「そうか…、ビッツ水割りを二つくれ」

「私は普通の水で」

「そうしてやってくれ」

注文を受け、ビッツはカウンターに回り水割りを作り始めた。ユイカには水を出す。

つつけんどな態度のユイカにエリカスは内心ため息をついた。

（きちんと聞いてくれればいいのだが。）

「なあ、ユイカ」

「例の話ならしないわよ。何度も話した通り、私 剣士を辞めるつもりはありませんから。」

にべも無い彼女にエリカスは片眉を上げたが、そのまま話を続ける。

「それが、国王の勅命^{ちよくめい}なら？」

「え？」

「その話が 国王の勅命ならどうだ？と言っている。
知つての通り国王の命令は絶対だ。

この国に所属している限り、命令は守ってもらつ。」

「う そ ー」

「嘘ではない。ここにこうして書状がある ー」

エリカスは懷ふくしほから書状を出して見せた。

解雇通知ではなく仮の扱いで停職となっていたが確かに国王直筆の署名があり、それは明日からとなっていた。

「明日正式な書類が君の下にも届くはずだ ー」

「……………」

俯うつむき震える彼女にエリカスは諭さとすように言った。

「君は結婚を控えた身だ。

そして、結婚式まで後一ヶ月になろうとしている。

少しの怪我が一大事なんだよ。

今日みたいな事が起こっては困るんだ。

頼むから城で大人しくしていてくれないか？」

「~~~~ バカ！！ ー」

ユイカは叫ぶと階段を駆け上がっていった。

「あれじゃあ、苦労するな。」

「だろ？」

それでも今日は最後まで聞いてくれたのだから、いい方だ。
エリカスはカランとグラスを傾^{かたむ}けた。
上でビッツの妻アルテとユイカが話しているのが聞こえる。

「あら、ユイカどうしたの？」

「なんでもない……」

「そう？　食事はどうする？
まだなら部屋まで持って行くわよ？」

「ありがとう。食事はまだだけど、食欲が無くって……今日はもう
休むから。」

「え、ええ……」

一人分の足音がさらに上へ登って行き、ドアの閉まる音がした。

2 - 2 話（後書き）

矛盾した会話とか修正してたら思ったより手間取りました；

2 - 3 話

「しっかし、よく国王が、あんな命令をだしたな。」

ユイカが聞いたら卒倒するだろうが、ユイカ隠れファンクラブの会長だろ？」

厳格げんかくそんな雰囲気なのに意外とミハーな父親の姿を思い出しエリカスは苦笑した。

「だからこそ、かな。」

「だからこそ？」

先ほど西の城庭で会話したあの2人はこう切り出した。

『牢勤めの者から聞いた話ですが』と。

「お前も薄々気づいているだろうが、最近都の治安が悪くなってきた。」

「確かに、最近ガラの悪いやつが増えているな。それがどうした。」

「その理由は、ユイカの結婚が間近に迫ったからなんだ。」

「は？ ユイカの結婚が近いからガラの悪いやつが集まってくる？」

「なんだそれは？」

「強いやつを倒して名を上げようとする者はどこにでもいるだろう？ ユイカも例外ではない。彼女は強いからな。」

「今までにも今日城で戦うことになったような事例は何度もあった。」

「が、その度に彼女は勝ってきた。結果、彼女はますます名を上げ狙う者が増えてきた。」

「もともと治安の悪化に伴い街の警備を強化して取り締まっていたんだが、今日聞いた話によると、牢に捕らえた者達のほとんどがこう言っているそうだ。」

『ユイカと戦わせろ』と」

「成る程。その長い講釈を訳すと。ユイカが結婚して迂闊に手を出せない存在になる前に勝って名を上げようってわけだな」

「・・・そういうことだ。」

「連中が礼儀をわきまえて一対一で挑んでくるようなやつらならよかったんだが、」

「いや、良くは無いがその方がずっとましだ。」

「だが、都に集まっている連中がそうするとも思えないからな。いくら彼女が強いと言っても大勢と戦って無事ですむとは思えない。」

「まして、今は結婚式前。」

当日、傷だらけの花嫁を迎え入れるわけにも行かないだろ？
今まで、何事も無かったのが不思議だよ」

「手は先に打つ。か…

なあ、ユイカから剣を取り上げる事だけが、あいつを守る唯一の方法か？」

「そう思うが、どうかしたか？」

「いや、その方法だと結婚式の日に不満を持った奴らが暴動を起こしかねないと思ってな」

「しかし、他に方法は無いだろう？」

「いや、一つある。

そいつらに無理にでも一対一の礼儀を守らせてやればいいのか」

「どうやって？」

「武器OKの腕試しをトーナメントで行うんだ。

そうすれば、体力を使いすぎないからユイカが負ける可能性も少ないだろ？」

あいつと戦うまでに勝ち抜けられないようなやつは実力不足ってことだしな」

「それはそうだがユイカが怪我をしてもらっては困る」

「あんな」

ビッツは飽きた調子で続けた。

「ユイカが大怪我するのと、かすり傷程度ですむのと、結婚式で暴動が起こるのと、どれがいいんだ？」

「それは・・・」

「国王ホクホクで、ユイカは剣士を辞めずにお前と無事結婚式を迎えられて、暴動は起きない！」

「これがベストじゃないか！！
かすり傷ぐらい大目にみるよ」

「すごい言われようだが、国王は”ユイカの戦う姿”が好きである。都に集まった者達も、^{チャンス}機会が与えられるのだ文句は言えないだろう。ビッツの言うことはもつともだった。

「わかった、ユイカに話してくる・・・」

エリカスはしぶしぶ頷くと重い足取りでのろのろと上がるユイカの部屋へ上がって行った。

（まったく世話の焼ける・・・）

ビッツは自分も何か飲もうとウイスキーの瓶を手を取った。貸切のため一般客は入ってこないし問題はないだろう。

砕いた氷をグラスに入れて中身を注ぐとして手を止める。

2階でドアをドンドンと叩く音がした。

そんなに強く叩かなくても中には聞こえているだろうに、隣の宿泊客に迷惑だ。

おおよそユイカが拗^すねて扉をあけないのだろうが…。

しかし、それを裏切るようにドアが開く音がした。

と思った瞬間、ダダダツトいう音と共にエリカスが酒場に飛び込んできた。

「ビツツ！ ユイカがいない！！ 窓から外へ出たみたいなんだ。
あいつ、外は危ないとさっき言っ…」

「言ってないだろ……。」

「え？ ……」

「お前、国王の命令で剣士を辞めさせるとしか言ってないぞ。」

「……………」

沈黙が酒場に下りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8112y/>

Emotion Diary Central

2011年12月3日19時00分発行